

スポーツマンシップを問う

今年6月、日本人初の世界ライト級王者として、一時代を築いた元プロボクサーでタレントのガッツ石松さんが、肺炎のため亡くなりました。1974年、彼が世界チャンピオンに勝った時、拳を握り喜びを表現した姿が翌日の新聞で大きく飾られると、子供から大人までガッツさんの勝利のポーズを真似しました。私たちが何かを成し遂げた瞬間、思わず拳を握って喜びを表現する「ガッツポーズ」は、この時、名付けられたものです。感情を抑えることなく、喜びを全身で表す姿は、苦難を乗り越えて勝利を手にしたからこそ、とても美しく思えます。

しかし、皆さんも御存知のとおり、テニスや相撲の世界では、試合中の過度に感情を表現することは、紳士的や武士道に反する行為であると捉えられています。この1月の箱根駅伝では、ランナーがわざわざラインを逸れて他大学の監督が乗る伴走車に近づき、ガッツポーズをしたことでスポーツマンシップに欠けるのではないかと騒動になりました。世界最高峰のプロスポーツでもあるメジャーリーグでは、ホームランを打った直後のバットフリップなどの行為が挑発行為ではないかと物議をかもすこともあり、乱闘にまで発展するケースが多々あります。

そもそもスポーツは、対戦相手の存在をもって成立することです。また、勝敗にこだわるのではなく、フェアプレーなどの誠実な態度を重視するからこそ、私たちは感動的なシーンに心打たれます。これらを踏まえると、スポーツマンシップとは、選手、審判、応援する人たちなど、スポーツに関わるすべての人々と良好な関係を築くことが求められているのではないのでしょうか。



令和8年8月、奈良県で開催された全国高等学校総合体育大会テニス大会女子ダブルスには、本校テニス部が勝利を信じ、仲間と共にコートの中で全力を尽くしていました。インターハイ出場を果たした選手は、応援に駆け付けた保護者や学校関係者が見守る中、対戦相手へのリスペクトを忘れることなく、得点が入ると小さく拳を一握りし、自己の力を最大限発揮しようと果敢に挑戦しました。

努力の成果が表れた瞬間、感情をむき出しにして自己を誇張し、勝った喜びを表現することは自然なことでもあり、自分だけではなく、チームを鼓舞することにもつながります。

しかし、大切なことは、スポーツの試合は、敵味方の争いではなく、相手と自分で作り上げるもの、すなわち、相手の協力なくては成り立たないものなのです。

選手の思いは、残念ながら叶わなかったものの、会場では、観客の皆さんが最後まで諦めなかった努力に惜しみない拍手でペアの二人を称えました。全国の舞台であろうとも、部活動をとおして身に付けた「振舞」が学びの匂いとなり、全力を尽くした証として選手の心にしっかりと刻まれたことでしょう。

令和8年8月